

文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究（平成 22 ～ 26 年度）  
ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究

A01・A02・B02 班合同研究会

# 旧人・新人の狩猟具と狩猟法

## 予稿集

2013年 2月9日（土）／10日（日）  
於 東北大学川内キャンパス・文学部第1講義室

主催：文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究「交替劇」A01/A02/B02 班  
共催：東北大学大学院文学研究科考古学専攻分野



## A01/A02/B02 班合同研究会 『旧人・新人の狩猟具と狩猟法』

開催日：2013年2月9日（土）・10日（日）

会場：東北大学川内キャンパス・文学部第1講義室

発表25分・質疑応答15分

主催：文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究「交替劇」A01/A02/B02班

共催：東北大学大学院文学研究科考古学専攻分野

### プログラム PROGRAM

---

#### 2月9日（土）

- 13：00－13：10 趣旨説明
- 13：10－13：50 小野 昭（明治大学）  
組み合わせ狩猟具が出現するまで：シェーニンゲンの木製槍とその対象獣
- 13：50－14：30 佐野勝宏（東北大学）  
複合的狩猟技術の出現：新人のイノベーション
- 14：30－15：10 阿子島香（東北大学）  
バッファロー・ハンター、トナカイ・ハンターの遺跡と「民族考古学」
- 15：10－15：25 休憩
- 15：25－16：05 米田 穰（東京大学）  
同位体分析からみた旧人・新人の食料獲得行動
- 16：05－16：45 日暮泰男（大阪大学）  
旧人・新人の投擲運動：生体力学的検討
- 16：45－17：00 休憩
- 17：00－17：45 討論
- 19：00－ 懇親会

#### 2月10日（日）

- 9：00－9：40 早木仁成（神戸学院大学）  
チンパンジーの狩猟
- 9：40－10：20 林 耕次（神戸学院大学）  
アフリカの狩猟採集民の狩猟史：とくに狩猟方法と狩猟具について
- 10：20－11：00 窪田幸子（神戸大学）  
オーストラリア・アボリジニの投槍器と槍：技術伝播の一考察
- 11：00－11：15 休憩
- 11：15－11：30 池谷和信（国立民族学博物館）  
コメント
- 11：30－12：30 総合討論

## 目次

## CONTENTS

---

趣旨・・3

### 研究発表

1. 組み合わせ狩猟具が出現するまで：シェーニンゲンの木製槍とその対象獣・・・・・・・・・・4  
小野 昭
2. 複合的狩猟技術の出現：新人のイノベーション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5  
佐野勝宏
3. バッファロー・ハンター、トナカイ・ハンターの遺跡と「民族考古学」・・・・・・・・・・6  
阿子島香
4. 同位体分析からみた旧人・新人の食料獲得行動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7  
米田 穰
5. 旧人・新人の投擲運動：生体力学的検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8  
日暮泰男
6. チンパンジーの狩猟・・9  
早木仁成
7. アフリカの狩猟採集民の狩猟史：とくに狩猟方法と狩猟具について・・・・・・・・・・11  
林 耕次
8. オーストラリア・アボリジニの投槍器と槍：技術伝播の一考察・・・・・・・・・・12  
窪田幸子

## 趣旨

新人ホモ・サピエンスは、投槍器や弓矢といった遠隔射撃を可能にする投射具を開発し、これにより狩猟法や対象獣の幅を広げていったと考えられる。一方、旧人ネアンデルタールに関しては、飛び道具の使用に関して否定的な意見が多い。人類の狩猟法はいかに進化し、新人と旧人との間に、狩猟法において生存競争を左右する決定的な差異は存在したのか？

本合同研究会では、考古学（小野 昭・佐野勝宏・阿子島香）、同位体分析（米田 穰）、生体力学（日暮泰男）、霊長類研究（早木仁成）、文化人類学（林 耕次・窪田幸子）の観点から、この問題について議論し、旧人・新人の狩猟戦略の違いが両者の交替劇に関与した可能性について議論したい。

**佐野 勝宏**

東北大学大学院・文学研究科

## 組み合わせ狩猟具が出現するまで：シェーニンゲンの木製槍とその対象獣 小野 昭（明治大学・黒耀石研究センター）

**報告の目的：**人類は進化の過程で、道具を特定素材の単体として使用する段階から、異なる素材を組み合わせる一つの道具として使うようになる。それは道具のセットが多様になるだけでなく、組み合わせにともなう選択肢の多様化と、未知の組み合わせへの可能性を加速させたであろう。本報告では、こうした道具の組み合わせ、特に狩猟具に組み合わせ道具が出現する以前の姿を探ることで、新人段階の新しい道具体系の出現の意義を間接的に浮かび上がらせる。

**対象：**道具一般ではなく、狩猟具の始まりを定義することは資料的に制限があり明確にはできない。しかし今日までの資料の蓄積から、1) 明確に人為的な加工の痕跡が認められ、2) 形態学的にも説明が可能で、3) 狩猟の対象となった動物との関連が考古学的なコンテキストからも説明可能な出土状況をしめしている、という条件を満たしているのは槍（ヤリ）である。槍は人類が考案した最初の狩猟具であったことはほぼ間違いないであろう。槍は木製であり、他の素材を槍の先に付けることのない単体の木槍であった。

具体的には中部ヨーロッパ、ドイツのハノーファーの北東約 80 km にあるシェーニンゲン Schöningen 遺跡の木槍を通してこの問題を考える。1994 年に発見された 3 本の槍は、泥炭にパックされていたため群を抜いて保存が良好である。地質学上の位置はホルスタイン間氷期のラインドルフ期に属し *ca.* 400ka と推定されていた(Thieme, 1997; Mania, 1998)が、酸素同意体ステージに基づく複数の気候変動パターンの比較から *ca.*310ka であろうとされている(Jöris und Baales, 2003)。

マツ科トウヒ属の 3 本の槍が報告されている。木槍 I は 2.25m、II は基部が欠損しているため 2.3m+ $\alpha$ 、III は 1.82m である。シャフトはフリント製のスクレイパーによって整形され削り痕跡も鮮明で先端部は極めて鋭く整形されている。形態上の完成度は高く全体のプロポーションは現在の競技用女性槍のデータに近いという(Rieder, 2000)。保存良好な動物骨が 25,000 点以上発見されて、アンティクスゾウ、サイ、アカシカを含むが、90%はウマ *Equus mosbachensis* であり、多くの骨には解体痕跡を示す破砕痕や切創 cut mark がある (Thieme, 2005)。遺跡は湖岸に展開した狩猟解体場と考えられ、ウマ 10 頭の遺存体が木槍との強い相関で発見されている。巨大なアンティクスゾウが狩猟の対象であったかどうかは議論がある。

**方法：**1) 出土状況のコンテキストから判断する、2) 時期は前後するがビルツィンクスレーベン遺跡、ノイマルク・ノルト遺跡との比較により、木器（木槍）、石器、骨器の相互関係を明らかにし、狩猟対象動物の特徴を見る、3) シェーニンゲンの木槍のレプリカを使った投射実験結果を見る (Rieder, 2000, 2007) ことで、「突き槍」と「投槍器・弓矢」の中間に位置する投槍の性格を検討する。

## 複合的狩猟技術の出現：新人のイノベーション

佐野勝宏（東北大学大学院・文学研究科）

本発表では、組合せ狩猟具が出現し、その後複合的狩猟技術（complex hunting technology）が開発されるまでの狩猟技術の進化史について報告する。

旧人段階になると、木製槍に石器先端部を装着した組合せ狩猟具が使われ始めたことが、石器に残された衝撃剥離（Callow 1986; Shea 1988; Villa et al. 2009; Lazuén 2012 等）、着柄痕（Boëda et al. 2008; Rots 2013）、動物骨に突き刺さった石器（Boëda et al. 1999）、等の複数の証拠から明らかである。これにより、旧人は狩猟具の破壊力を増加させ、対象獣により致命的な傷を与え易くなったと考えられる。旧人が槍を投げていたか突き槍として使用していたかは意見が分かれるが、仮に投げ槍として使用していたとしても、投げ槍の有効射撃距離は短いので、彼らは依然として対象獣との接近戦を余儀なくされたであろう。

人類に初めて遠隔射撃を可能にした道具は、投槍器である。シェイは、投槍器や弓によって投射される狩猟具を本当の意味での飛び道具（projectile）と位置付けた（Shea 2006）。そして、シェイとシスクは、投槍器や弓矢を用いて比較的小さな槍先を投射し、獲物から安全な距離を保ちつつ、速い投射速度によって獲物に致命的な傷を負わすことのできる狩猟技術を複合的投射技術（complex projectile technology）と呼び、狩猟技術史における画期と位置付けた（Shea and Sisk 2010）。

投槍器の最初の考古学的証拠は、フランス・ソリュートレアン期のコンブ・サニエール遺跡から出土した投槍器断片で、その年代は非校正の炭素 14 年代値でおよそ 19-17,000 BP である（Geneste and Plisson 1986; Cattelain 1989）。一方シェイ等は、有機質であるために遺跡の保存状況に左右される投槍器の有無ではなく、石器の形態分析から投槍器で投射された槍先（ダーツ）の出現時期を明らかにする試みを開始した（Shea 2006; Shea and Sisk 2010; Sisk and Shea 2011）。その結果、アフリカでは、新人が集中的な出アフリカを果たす直前の 70-60 ka の頃に、複合的投射技術が出現し始める可能性を指摘した。さらに、レヴァントやヨーロッパでは、当該地域に新人が拡散していく 50-40 ka 以降に複合的投射技術が現れたと結論づけた。

その少し後、レヴァントやヨーロッパでは、柄の側縁に複数の小石刃を埋め込んで狩猟具とする新しい技術が生まれる。この頃の小石刃が骨角製尖頭器の側縁に埋め込まれていたか、木製の柄に直接装着されていたかは検討されなければならないが、マグダレニアン期には小石刃を骨角製尖頭器の側縁に埋め、更にそれを木製の柄に装着する 3 素材の組合せ狩猟具が一般化する。これにより、石器・骨角器・木器の 3 素材からなる組合せ狩猟具を投槍器で投射する、複合的狩猟技術が誕生する。複合的狩猟技術は、複雑な工程を経て製作・使用され手間がかかるが、殺傷能力、石材効率、メンテナンス、の面でのメリットが大きい。これは、短期的観点よりも、長期的に見た効果向上とリスク低減を追及する、新人的思考を代表する技術と言える。

## バッファロー・ハンター、トナカイ・ハンターの遺跡と「民族考古学」

阿子島 香（東北大学大学院・文学研究科）

広義の「人類学としての考古学」は、漸く日本考古学の旧石器・縄文・弥生の各時代の実証研究の中で定着してきたように思われる。狭義にはアメリカのプロセス考古学(1962～)パラダイムの枠であったが、1990年代以降、イギリス（ポストプロセス派、認知考古学）・フランス（技術人類学）他の動向とグローバル化し混然とした現状がある。日本考古学の伝統的枠組みの再構築は急務である。石器研究では「技術組織論」「動作連鎖論」の実践が新展開をみている。今回は、報告者が参画した動物遺存体の保存良好な事例を取り上げ、新人の狩猟活動の実態を考える。あわせて近年の欧米での調査事例からも紹介したい。「計画的に組織化された諸活動の複合」の結果として形成される「遺跡の内部構造」の複雑な様相を、旧人の場合と比較していくことが課題であろう。

文化人類学と考古学との分野融合を発展させるために不可欠なのは、考古学資料の特質についての共通理解である。考古資料は現在に存在し静止している一方で、復元したい人間活動は過去におけるダイナミズムである。現在の静態と過去の動態とを架橋する方法論として、ミドルレンジセオリーがアメリカで進展した(Binford 1980)。考古資料の本質に、個別の活動形跡が資料実態としては重複して存在する「パリンプセスト」現象があるが、特にこの面は民族学研究者との共通理解のカギになると考えられるので、重点的に報告したい。マクロなセトルメントパターンからマイクロな石器使用痕まで、形跡重複現象は資料の実態を規定し、また観察可能な考古資料を形成する過程としてクリティカルに働く。

フランス南西部ランド県に所在する後期旧石器時代マドレーヌ文化期のドゥフォール岩陰遺跡では、岩陰前のテラスに累々と構築された礫敷遺構が検出され、トナカイ狩猟民の生活実態が追求された(Straus, ed. 1995)。礫敷遺構は8枚以上検出され、自然石、崩落石灰岩、多量の動物骨（トナカイとアカシカが主体）、フリント石器と石片等が集積して、複雑な構造を構成している。冬季の間を主とする断続的な居住形跡が、約1200年間に第4層の礫敷遺構層を形成し、岩陰本体から下部の斜面までに重複した文化層が堆積している。居住の前半期には、集約的なトナカイ狩猟と処理活動が推定され、アカシカが増加する後半期とは、遺跡内部の空間利用の面でも対照的な構造が認められる。石器組成では細石器化が進行し、組み合わせ狩猟具という側面が強い「背付き小石刃」が過半に及ぶ。石器の使用痕では、機能的に比較的均質なエンドスクレイパー、多様な用途を示す彫刻刀、使用痕跡が相対的に不明瞭な背付き小石刃など、器種による技術組織上の相違が認識される。

アメリカ西部大平原地域の、モンタナ州ミルアイアン遺跡は、パレオインディアン文化期の開地遺跡で、バッファローの集約的な狩猟・解体の場として北米最古級である骨層堆積が検出された(Frison, ed. 1996)。ゴシャン型尖頭器が単独で出土し、投槍器による群れの集約狩猟の状況を示す。同時期のキャンプ跡地点が近辺で発掘され、両者を比較できた。石器石材により相違する「技術組織」の統合性は、新人の狩猟文化の特質をよく示す。



## 同位体分析からみた旧人・新人の食料獲得行動

米田 穰（東京大学・総合研究博物館）

4万年前頃までヨーロッパに生息していた旧人の一種であるホモ・ネアンデルターレンシス（いわゆるネアンデルタール）は、我々新人（ホモ・サピエンス）に最も近縁な絶滅人類であり、ホモ・サピエンスの種特性を理解するためには格好の比較対象である。更新世のヨーロッパに進出した新人がその後も生存できたのに対し、なぜネアンデルタールが減びてしまった理由として、その生業戦略の違いが指摘されることが多い。しかしながら、更新世の遺跡に残される生活の痕跡は極めて断片的であり、当時の生業戦略を復元することは用意ではない。

1999年のベルギーで出土したネアンデルタールで人骨化石から有機物であるコラーゲンを抽出し、その炭素・窒素同位体比から彼らが利用した食資源を推定する研究が報告された（Bocherens et al. *Journal of Archaeological Science* 26, 1999）。その結果は、同じ生態系の動物と比較しても非常に高い窒素同位体比を持つ特徴を示しており、ネアンデルタールの食性は非常に肉食性が強い可能性が示された。その後、ヨーロッパ各地のネアンデルタールが分析され、年代も10万年から4万年前の時間変化も検討されている。しかし、一貫して生態系のなかで最も高い窒素同位体比を示すという特徴は共通して指摘されている。

一方、後期旧石器文化をもつ新人についても、同様の同位体分析が行われ、ネアンデルタールよりも高い窒素同位体比が報告され、陸上生態系のみならず内水面や海洋の生態系が利用されたと解釈され、大きな議論を呼んだ。さらに、分析事例が増えるにつれ、ヨーロッパの新人はネアンデルタールとくらべると、同位体の特徴に地域差が大きく、利用する食料資源の種類がより多くなったことがその原因であると考えられている。さらに、ヨーロッパ以外の地域からも更新世の新人化石で同位体分析が行われ、特徴的な傾向が報告され始めており、新人と旧人では食を巡る生業戦略の違いがあり、とくにその可塑性の違いが両者の命運を分ける原因になったのではないかという考えが提示されてきた。

しかし、近年になって全く新しい分野からの研究によって、ネアンデルタールの食生態に関する新しい見解が提示されている。例えば、歯石に残されたデンプン粒の研究からは、かれらが単純な肉食ではなく、植物質とくにエネルギー源として重要な加熱されたデンプンを利用していた可能性が指摘された。また、歯の咬耗の研究からは、ネアンデルタールにおいても食生態に地域差が認められるという研究も報告されており、ネアンデルタールの食生態の特徴と、新人との本質的な違いについては新たに議論が起こりつつある状況である。

## 旧人・新人の投擲運動：生体力学的検討 日暮泰男（大阪大学大学院・人間科学研究科）

投げ槍や投槍器といった狩猟具をつかうためには、使用者が物を投げる（投擲）能力をもっていなければならない。投擲運動はヒト以外の現生動物ではほとんど見られない身体動作である。ヒトの進化という文脈における投擲運動について知られていることは少ない。旧人の投擲能力は新人にくらべてどのていどのものだったのだろうか。投擲能力の高さ低さは、獲物の採食効率やさらには環境適応能力と関係する可能性がある。旧人の投擲能力をしらべるために利用可能な情報は骨格形態にほぼかぎられるが、生体力学的方法論をもちいれば何らかの推定ができるだろうと発表者は考えている。本発表では、まず、研究例の豊富な、化石人類における歩行復元研究をレビューすることによって、骨格形態にもとづいて過去の身体動作を推定する具体的な手続きを紹介する。次に、発表者が現在とりくんでいる旧人の投擲能力推定の進捗状況を報告する。

## チンパンジーの狩猟

早木仁成（神戸学院大学・人文学部）

1960年代にJ・グドールによって、野生のチンパンジーが道具を製作・使用するだけでなく、哺乳動物を狩り、肉食をすることが明らかになったとき、グドールをチンパンジー調査に送り込んだ人類学者のルイス・リーキーは、「人類の定義を変えるか、チンパンジーをヒトの仲間を含めるか」だと言ったという。その後の遺伝学的研究成果もあって、当時オランウータン科に分類されていたチンパンジーは現在ではヒト科の一員である。本発表では、50年以上にわたる野生チンパンジーの研究の中で明らかになったチンパンジーの狩猟行動の実態を紹介したい。

チンパンジーの狩猟対象は、アカコロブスやアカオザルなどの各種霊長類（チンパンジーやヒトを含む）やダイカー、ブッシュバック、ブッシュピッグ、イボイノシシなどの有蹄類の他、リス、ムササビ、ネズミ、シベット、トガリネズミ、マングース、センザンコウ、ハイラックスなど多岐にわたる。長期にわたる調査が継続しているタンザニアのゴンベやマハレでは、調査の初期にはダイカーやイノシシなどの狩猟が比較的良好に観察されていたが、近年は狩猟対象がアカコロブスに特化する傾向がみられる。

狩猟方法は基本的に「つかみ獲り」であるといつてよい。狩猟対象によっては、たまたま出くわした獲物（ブルーダイカーなど）を一瞬のうちに捕まえることもあるし、ブッシュピッグの巣を発見したようなときには、忍び寄り、草の下に隠れている子どもを熱心に探索することもある。アカコロブスのようなサル類を対象とするときには、たいてい集団狩りとなり、獲物を追跡する行動がしばしば見られる。このような集団狩りでは、チンパンジー同士の間で「協同作業」が生じているかどうか議論の対象となっている。コートジボワールのタイで調査したボッシュ夫妻は「協同狩猟」であることを強調しているが、タンザニアのマハレで調査した西田は「同時多発的個人狩り」と表現している。

捕獲された獲物の殺害方法は粗野なものである。小型の獲物では、捕獲した瞬間に首の骨を折るなどして絶命させることができるが、比較的大きな獲物やブッシュピッグのように簡単には殺せない獲物もある。そのような場合には、雄が誇示ディスプレイをするときに見せるのと同じように、獲物を引きずりながら走り回り、あちこちに叩きつけてぐったりさせる。そして、しばしば生きてまま腹を裂いて食べ始める。

単独狩りで捕獲した獲物は一人で消費してしまうこともあるが、集団狩りの場合には一人で消費することは難しい。なぜなら、獲物をもつ者のところへ多くのチンパンジーが集まるからである。マハレでは、獲物はしばしば第1位の雄に奪われたのちに、その周囲でベツギングをするチンパンジーたちに分配される。ただし、その分配は必ずしも積極的なものではなく、第1位の雄が手にしている獲物の一部を横から咬み切って持ち去ったりすることを許容するという程度のことが普通である。

狩猟の際に道具を使用するという事例はこれまでほとんど知られていなかったが、最近

セネガルのフォンゴリで道具を使用した狩猟行動が高頻度で観察されている。

ネアンデルタールとサピエンスの狩猟行動の差異を検討する上で、チンパンジーの狩猟行動が直接的な示唆を与えることはあまりない。なぜなら、この 3 種の系統上の差異を念頭に置けば、ネアンデルタールもサピエンスもチンパンジーよりずっと洗練された狩猟行動を行っていたと考えるのが妥当だからである。ただ、狩猟行動の進化の筋道を考える上での出発点としての意味は大きい。

## アフリカの狩猟採集民の狩猟史：とくに狩猟方法と狩猟具について 林 耕次（神戸学院大学人文学部）

約 700 万年前にアフリカで誕生した人類は、環境に適応しながら進化を続けてきた。食糧獲得の手段としての人類による狩猟の痕跡は、アフリカ各地の考古学的資料から窺い知ることができる。例えば、東アフリカで発掘された石器からは、石斧や尖頭器としての使用のほか、木製の狩猟具を製作するためと考えられる形状の存在が指摘されている。なお、アフリカでの鉄器の製作はおよそ二千年前からとされる。

本発表では、石器時代の狩猟史を概観しつつ、現代の狩猟採集民を中心とした狩猟活動に関する事例をもとにしながら、アフリカにおける狩猟方法と狩猟具についての歴史と多様性について述べる。

1968 年に出版された *Man the Hunter* (Lee and DeVore eds.) では、現代のアフリカにおける狩猟採集民として、熱帯のピグミー、南部カラハリ砂漠のブッシュマン、東アフリカ・タンザニアのハッザが紹介されている。その後も、欧米や日本の人類学者らによって、アフリカ各地における狩猟民、あるいは狩猟活動に関連する詳細な報告が相次いだ。1970 年代から 80 年代に報告されたアフリカにおける主な狩猟具（方法）としては、槍、弓矢、網、罠があげられている（\*槍先や鏃として、狩猟具の一部には鉄器を使用）。なお、ピグミー系の集団による網猟や罠猟は、もともと周辺の農耕民から伝わったものとされる論考もある。しかし、そのような技術や道具の起源についての議論を踏まえつつも、現代の「狩猟採集民」とよばれる人びとは、狩猟技術はもちろんのこと、狩猟対象となる動物の生態や狩猟場の環境など、狩猟に関する知識に深く精通していることは疑いない。また、社会集団としても、狩猟に関わる社会的制度や慣習が色濃く残り、今なお「狩猟民」として普遍的特徴、あるいは生活スタイルの一面をみることができる。

広大なアフリカ大陸では、多様な自然環境を背景とした多種にわたる動物相がみられるが、それらに対応した狩猟具や狩猟方法の特徴に着目しつつ、アフリカの狩猟採集民のモデルを示し、その生活形態と多様性について紹介する。また、実際の狩猟活動を取り巻く狩猟採集民の平等性や互酬性に言及しながら、アフリカ狩猟採集民の特質を指摘する。

以上のように、現代のアフリカ狩猟採集民の姿を通じて、農耕・牧畜革命以前の狩猟活動や、旧人と比較した場合の社会性、学習能力の違いについて想像を巡らせてみたい。

## オーストラリア・アボリジニの投槍器と槍：技術伝播の一考察

窪田幸子（神戸大学大学院・国際文化学研究科）

投槍器は、人類の技術の一つの重要な発明の一つであり、槍という武器の飛距離、威力、正確さの増大をもたらしたと考えられている。もっとも古い事例は、後期旧石器時代のヨーロッパで見られる。近年は、オセアニアと新世界に見られるが、そのほとんどの地域で、弓矢にとって代わられた。オーストラリアには弓矢は入らず、現在まで、ウーメラと呼ばれる投槍器が継続して全土に広い範囲で主たる武器として使われている唯一の場所といえる。

オーストラリアに投槍器が入った時期について、明確な年代確定はむずかしいが、だいたい5千年前～3千年くらい前にニューギニアから伝わったと考えられている。投槍器は、軽い槍に有効なもので、もともとあった手投げ槍が大きく重いものだったため、適応が必要だった。

現在のオーストラリアで見られる投槍器は、サイズや形にばらつきが大きく、オーストラリアに入ってから、適応を遂げ、多様性をえたと考えられる。投槍器の受容は、シンプルに見えるが、実は運動の変化だけでなく、槍の重さ、長さを、槍投器にあわせて変えなくてはならない。重い槍は、投槍器では投げられない。軽い、中程度の重さの槍を使っていた人々には、投槍器は受け入れられやすかったと考えられる。一方、重い投げ槍を使っていた人々には、受け入れは困難であったと考えられる。

その結果、投槍器は、ほとんど全土に分布しているものの、その利用程度には多様性があり、例えばタスマニア、メルビル島、バサースト島、クィーンズランド州海岸部の一部、ニューサウスウェールズ州北部など、全く投槍器のない地域もあり、また、投槍器はあるが、手投げ槍が主な地域も多い。

この発表では、投槍器のオーストラリア大陸における分布と、その形状と状況の多様性をみることから、オーストラリアへの「投槍器／槍」という新しい技術の展開と受け入れ、または、受け入れ拒否の在り方の多様性を考えてみたい。そのことから、BP5000～3000年のオーストラリアにおける新技術への対応の多様性を考察する一助としたい。

メモ MEMO

---

メモ MEMO

---



A01/A02/B02 班合同研究会

**旧人・新人の狩猟具と狩猟法**

**予稿集**

編 集 佐野 勝宏

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

東北大学大学院文学研究科

発 行 科学研究費補助金

新学術領域研究「交替劇」 A01/02/B02 班

2013 年 2 月 8 日